

## 読譜力と音楽的基礎能力との関連性について —音高イメージを持って楽譜を読むことができるようになるために—

吉田直子

(京都教育大学大学院修了)

### The Relationship between Reading Music and Basic Musical Ability —Reading from Sheet Music with Recognition of pitch—

Naoko Yoshida

2010年11月30日受理

**抄録**：本研究は音高イメージを持って楽譜が読めるために、必要な音楽的基礎能力をあきらかにしようとするものである。単音の音名判別力、音群の音名判別力、音階の音程把握力の3つの音楽的基礎能力と読譜力とを照合した結果、3つの音楽的基礎能力は、いずれも読譜力との関連性がみられた。また調査の結果から読譜力と視唱力がまったく一致するわけではなかった。

**キーワード**：音高イメージ、音楽的基礎能力、音名判別力、音階、読譜力

## I. 本研究の目的

本論文は実践教育研究第10号に掲載された「楽譜を見てすぐ歌う力『視唱力』についての意識—幼児教育科の学生を対象とした調査より—」の継続研究である。第10号では幼児教育を専攻する学生を対象に楽譜を見てすぐ歌うこと、つまり「視唱」に対する意識を詳しく分析した結果、学生の多くが難しいと感じている一方で、習得に意欲を持っていることを述べた。学生には視唱力の必要性が十分認識されており、視唱力の有無は音楽指導上の自信に密接にかかわりがあることが確認された。さらに、視唱力が身につけており将来子どもたちに音楽指導をする上で不安を抱いていない学生の多くが、ピアノ等稽古事を比較的長く経験していることもあきらかになった(吉田2009:118)。

楽譜を見て心の中に抱いている音高イメージは、音に表出されなければ他者が把握することはできないが、視唱は自然な表出方法の1つである<sup>1)</sup>。しかし視唱は、心の中の音高イメージの表出の結果である一方で、発声や声域など声そのものに関する要因による影響を完全には排除できない。筆者の2007年のアンケート調査でも楽譜を見てすぐ歌うことが難しい原因として、「声がうまく出ない」と答えた被験者が23%あったことからこのことはあきらかである(吉田2008:3)。

音高イメージの把握力については、発声や声域など声そのものに関する要因による影響をできるだけ排除した方法で判定されることが望ましい。そこで今回は視唱ではなく、よく知られている童謡や唱歌の一部分を楽譜で呈示して旋律の音高を心の中にイメージさせ、曲の題名を答えさせることにより音高イメージの把握力を判定することにした。この方法で判定された旋律の音高イメージの把握力と、単音の音名判別力、音群の音名判別力、音階の音程把握力という旋律の音高の把握に関係が深いと思われる3つの音楽基礎能力の判定を照合することによりこれらの関連性について調査した。

本研究の目的は、楽譜を見て、聴取することなく旋律の音高を把握することができるために必要な音楽的基礎能力をあきらかにすることにより、有効な読譜指導法を考案するための資料を得ることである。次に研究の方法について具体的に述べる。

## Ⅱ. 研究方法

第 1 節の目的意識にもとづき、学生を対象に実施した調査の概要は次のとおりである。

### 1. 調査時期

2010 年 5 月 20 日、27 日、6 月 10 日の計 3 回

### 2. 調査対象

京都教育大学幼児教育専攻学生 2 回生 16 名、3 回生 18 名の計 34 名

### 3. 調査方法

調査は、単音の音名を判別する能力調査【課題 1】、音群の音名を判別する能力調査【課題 2】、音階の音程を把握する能力調査【課題 3】、【課題 4】、旋律の音高イメージを把握する能力調査【課題 5】を実施した。大学で個別形態で実施される「器楽」の授業時間内に、待機時間を利用して学内の教室で個別に実施した。調査時刻はあらかじめ被験者 1 人ずつに連絡して、予定時刻に待機している 4 階から 3 階の調査室に降りてくるように準備と手配をおこない、他者の調査の音声が漏れ聞こえないように配慮した。調査についてはすべて録音し、後日調査 3、調査 4 についてはこれをもとに筆者が採譜した。これらの 5 つの調査結果を照合して、関連性について検討した。

### 4. 調査回収率

89%（3 回生 4 名欠席のため計 30 名）

### 5. 調査対象者の属性

対象学生は大学入学後、大学で授業として次のような音楽教育を受講している。

#### (1) 「音楽基礎」

1 年後期に受講する授業である。内容はおもにソルフェージュで、子どもの歌を音名で歌うこと、簡単な旋律を歌いながら並行してリズムを打つこと、3～4 拍分の旋律の音名唱を模倣して歌い返すこと、I、V、IV の 3 種類の和音を中心に子どもの歌の旋律に対する伴奏付け、童話にふさわしい簡単な歌の創作などである。

#### (2) 「器楽 I」

1 年後期に受講する授業である。内容は、バイエル、ブルグミュラー、ソナチネ、併用曲など個人の進度に応じたピアノの個人レッスンである。

#### (3) 「器楽 II」

2 年前期から後期まで受講する授業である。「器楽 I」での実習を引き継ぎ、エレクトーンやピアノなどの楽器を使用したコード付けや弾き歌いなどの実習である。後期には、より実践的な内容をおこなう。《ちょうちよ》などの簡単な旋律を、スキップやジャンプ、ワルツなどの特徴的な身体的動きにふさわしいようにヴァリエーションしたり、それに合わせて身体を動かすこと、与えられた簡単な伴奏に適切な旋律を即興すること、与えられたイメージに適切な効果音や音楽を創作したり、その逆に与えられた効果音や音楽にふさわしいイメージを考えることなどである。

今回の調査対象者の 2 回生は「音楽基礎」、「器楽 I」を終了して「器楽 II」を学習中、3 回生は「音楽基礎」、「器楽 I」、「器楽 II」の学習を終えている状況である。では次に調査の内容について述べる。

## Ⅲ. 調査の内容

調査内容は音高の判別力について関連性が有ると予想される 3 つの音楽的基礎能力についての 4 つの課題と、旋律の音高イメージの把握力についての課題の合計 5 項目である。単音の音名判別力、音群の音名判別力、音階の音程把握力についての【課題 1】【課題 2】【課題 3】【課題 4】は、視唱能力で音高イメージの把握力を判定した 2009 年の調査データと比較対照できるように、内容を同一にした（吉田 2010b : 62-63）。音階の音程把握力についての【課題 3】については、2009 年の実施時には歌う際に音名・階名・ハミングのいずれでもよいことにしていたのに対し、今回はハミングを使用するように指示を変更した。この課題では「音名や階名が判別できる能力」とかかわりなく「音階の音程関係を把握できるか」について調査することが目的であるため、ハミン

グに統一して、より視点をはっきりさせるためである。

単音の音名判別力調査【課題1】、音群の音名判別力調査【課題2】、音階の音程把握力調査【課題3】、【課題4】、旋律の音高イメージ把握力調査【課題5】の詳細について、次に順に述べる。

### 1. 単音の音名判別力調査【課題1】

歌える音域範囲内の無作為に並べた10個の「単音」を判別させて「単音の音名判別力」について調べた（譜例1参照）。1人ずつ部屋に入って、1個につきメトロノーム♩=180のテンポで4拍分保持したピアノの音をCDに録音したものを1回ずつ、希望があれば2回まで聞かせ、「音名」を答えるように指示した。一般的に「音を聞いて音名を判別できる」場合に「音感がある」と考えられているが、「音を聞いて音名を判別できる」能力と「旋律の音高イメージ把握力」【課題5】との関連性を確認する目的で実施した。

【譜例1】単音音名判別力課題



### 2. 音群の音名判別力調査【課題2】

「3, 5, 7音から構成された短い音楽フレーズ」を聞かせて音名を判別させ、「横のつながりを持つ音群を聞いて音名を判別できる能力」を調査した（譜例2参照）。メトロノーム♩=100のテンポで弾かれた3音、5音、7音の音群のピアノの音をCDに録音したものを1回ずつ、希望があれば2回まで聞き、「音名」で答えるように指示した。この調査では、正しく「階名」で答えた場合、厳密には指示に対して「正しい」とは言えないが、音群における前後の音程関係を把握しているという意味で、まったく違う音名で答えた場合と区別されるべきだと考え、「階名」で答えたことを特記したうえで、正答扱いとした。「音名または階名が判別できる能力」と音高イメージ把握力【課題5】との関連をしらべるねらいである。

【譜例2】音群音名判別力課題



### 3. 音階（長音階）の音程把握力調査【課題3】【課題4】

音名や階名がわかるかどうかにかかわらず1オクターブの音階音相互の音程関係をイメージできるかについて、2つの調査をおこなった<sup>ii</sup>。【課題3】では、階名<ファ>にあたる<g<sub>1</sub>>音が抜けているニ長調の音階音列をピアノで1回、希望があれば2回まで弾いて聞かせ、その後すぐにハミングで模倣して歌うように指示した（譜例3参照）。実施に際し「課題の音列は音階である」等の説明は一切加えていない。

【譜例3】音階模倣唱課題



課題において階名<ファ>にあたる第4音<g<sub>1</sub>>を抜いているのは、次の理由による。デヴィッドソンは、歌唱において「個々の音高と高度に構造化された順序（音階）とを関連づける能力、および、規則正しい拍子とリズム面に現れるさまざまなパターンを調整する能力」（デヴィッドソン：119）を「操作的」と呼んで「音楽的発達の進歩した段階」（デヴィッドソン：120）と述べている。さらに「音楽における操作的な思考とは、人がある状態から他の状態へと行為を変形させたり逆転させたりすることがどの程度できるかということによって明らかになる」（デヴィッドソン：121）と述べた。たとえば操作的な思考ができなければ“Happy birthday to you”の歌を

長調で歌ったあと短調で歌うことができないと述べ（デヴィッドソン：121）、その理由を「行為の変形の基盤となる、安定した、明瞭で内面化された構造をもっていない」（デヴィッドソン：121）ためだと説明した。

音階の第4音は第3音との間に半音を形成し、音階の中でも音程の把握が難しい個所であると同時に、音階を特徴づける重要な音程である。このことから、【課題3】において音階音列の第4音を抜くという変形に対応できるならば「行為の変形の基盤となる、安定した、明瞭で内面化された構造をもつて」（デヴィッドソン：121）いるため音楽的に操作的な思考ができると考えた。この場合の「安定した、明瞭で内面化された構造」とは「調性に基づく音階構造」<sup>iii</sup>であると考えられる。スナイダーは音階について「音程のカテゴリーをスロットとする<sup>iv</sup> 比喩的な空間的スキーマ<sup>v</sup>としてみなすことができる」（2003 スナイダー：149）と述べている。これらのことから第4音<g<sub>1</sub>>が抜けていても全体を音階として把握できるようであれば、音階のスキーマにより、7つの音階音列の音程を記憶して歌うことが可能であると考えた。課題を完全な音階音列にした場合は、単に1つの「旋律形状全体としての記憶」（デヴィッドソン：121）として音階が記憶されている場合と、音階スキーマにより「操作的思考」ができる場合との区別がつかない。

また、課題をニ長調に設定したのは、ハ長調の場合は他調よりも個別の音名判別がしやすいため、音階の音程関係を把握できていなくても、個別の音高把握により歌えてしまうことを懸念したことと、模倣して歌わせるにあたり標準的な声域を考慮したためである。実施に際して明らかに声域が適していないと感じられた場合は、適宜声域にふさわしい調性に移調して実施した。リズム面において歌いにくい要因をできるだけ排除するため、基本的に2拍子系がなじみ易く歌いやすいと考え、4分の4拍子にした。

【課題4】では、As dur、Es dur、H dur、C durの4つの長音階の前半4音を聞かせ、これが「長音階の前半部分」であることを説明し、階名で「ドレミファソラシド」<sup>vi</sup>または「ドシラソファミレド」と全体が聞こえるように続きをハミングで歌うように指示した。前半の4音から調性と音階を感じ取り1オクターブ全体の音階をイメージできるかどうか調べることにより、1オクターブの音階音相互の音程関係全体をイメージできるかについて調査した（譜例4参照）。【課題3】と同様に、「操作的思考」ができるかどうかを調べる目的である。

#### 4. 音高イメージの把握力調査【課題5】

楽譜を見て音高をイメージすることができるかどうかについて、よく知られている童謡や唱歌の楽譜の一部を呈示して旋律の音高を心の中にイメージさせ、曲の題名を答えさせた（譜例5参照）。5曲の選定にあたっては曲中で使用されている音の内容が、階名<ドレミソ>、<ドレミソラ>、<ドレミファソ>、<ソドミソ>とかたよらないように注意した。拍子は1題だけ3拍子を使用した。また幼児教育科の学生になじみが有り、よく知られている曲かどうかについても留意した<sup>vii</sup>。曲名がわからなかった場合は、旋律を口ずさんで歌うように指示し、曲の旋律を口ずさむことができる場合は音高イメージが把握できていると判定した。楽譜は被験者が希望する時間だけ予見させ、開始音は特にピアノの音を聞かせずに自由な音高から始めさせた。

以上5つの課題の実施結果を総合し、次に分析と考察をおこなう。

【譜例4】音階唱課題



【譜例5】曲名判別課題



## IV. 調査の結果と分析

調査結果の評価方法は次のとおりである。【課題1】【課題2】の音名判別については単音、音群ともに正解数が80%以上をA4点、60%以上をB3点、40%以上をC2点、それ以下をD1点に点数化した。音階の音程把握力は2種類の調査を実施している。【課題3】では音高正しく歌えたものをA4点、調が違うなど音高は異なっているが音程は正しいものや第4音を歌ってしまったものをB3点、音程関係が音階にならなかったものをC2点、歌えなかったものをD1点とした。【課題4】では4問とも音階を歌えたものはA4点、3問歌えたものはB3点、2問歌えたものはC2点、1問歌えたものはD1点、歌えなかったものはE0点とした。【課題3】と【課題4】を総合して7点以上を音階の音程把握力Aとして4点、総合して5点以上7点未満をBとして3点、総合して3点以上5点未満をCとして2点、総合して2点以下をDとして1点に点数化した。【課題5】については、5曲とも曲名が判別できたか、または旋律を口ずさむことができたものをA5点、4曲の曲名が判別できたものがB4点、3曲判別できたらC3点と順次判別できた曲数を点数化した。

課題1～5の結果をふまえて、旋律の音高イメージを把握することができるために必要な音楽的能力について音高イメージの把握力と音楽的基礎能力の両面から分析と考察をおこなった。以下に順に詳しく述べる。

### 1. 音高イメージの把握力調査【課題5】の結果から見た場合

音高イメージの把握力調査【課題5】において、5点獲得して旋律の音高イメージ把握力があると判定されたAグループと、音高イメージ把握力が若干弱い4点またはかなり劣ると判定された1点、0点であったBグループの2つに分類した(表1、表2)。表1、2で「音高把握」は【課題5】、「単音」は【課題1】、「音群」は【課題2】、「音階」は【課題3】と【課題4】の総合点を意味している。【課題5】において5点獲得したAグループは19名、4点以下であったBグループは11名である。

表1 A グループ 19名

名前	音高把握	単音	音群	音階
ア	5	4	4	2
イ	5	4	4	4
ウ	5	3	2	4
エ	5	4	4	4
オ	5	4	4	4
カ	5	4	4	4
キ	5	4	3	3
ク	5	4	4	4
ケ	5	4	4	4
コ	5	4	4	4
サ	5	4	2	3
シ	5	4	4	4
ス	5	4	4	4
セ	5	4	4	4
ソ	5	4	4	4
タ	5	4	4	4
チ	5	4	4	4
ツ	5	4	2	4
テ	5	2	2	4
計	95	73	67	72
平均	5	3.8	3.5	3.8

表2 Bグループ 11名

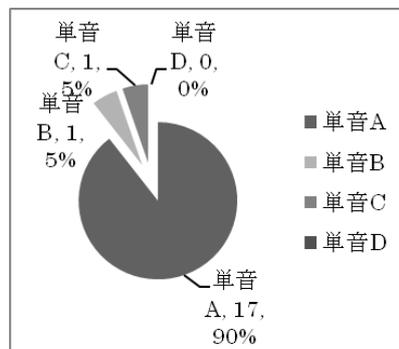
名前	音高把握	単音	音群	音階
ト	4	1	1	4
ナ	4	3	3	4
ニ	4	4	4	3
ヌ	4	3	2	2
ネ	0	2	1	1
ノ	4	4	4	2
ハ	4	4	2	4
ヒ	1	1	1	2
フ	4	2	2	2
ヘ	4	1	1	1
ホ	4	3	1	3
計	37	28	22	28
平均	3.4	2.5	2.0	2.5

このデータを基に、単音の音名判別力【課題 1】、音群の音名判別力【課題 2】、音階の音程把握力【課題 3】と【課題 4】のそれぞれについて、音高イメージの把握力【課題 5】との関連性について分析した。

(1) 単音の音名判別力

音高イメージの把握力が A であった A グループの単音判別力の得点分布を (図 1) に示す。(図 1) から音高イメージの把握力が A である被験者の 90%が単音の音名判別力は A であることから単音判別力と音高イメージ把握力との関連性が示されている一方で、単音判別力が特に優れていなくても残り 10%は何らかの能力によって音高イメージを把握できていることがわかる。

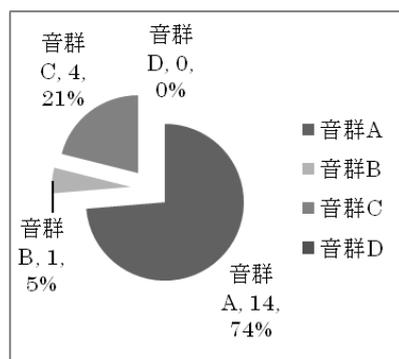
図 1  
音高イメージの把握力 A グループの単音判別力



(2) 音群の音名判別力

音高イメージの把握力 A であった A グループの音群判別力の得点分布を (図 2) に示す。この図 2 から音高イメージの把握力が A である被験者の 74%は音群判別力が A であり、音群判別力と音高イメージの把握力との関連性が示されている一方で、音群判別力が特に優れていなくても、残り 26%が何らかの能力によって音高を心の中にイメージできていることがわかる。

図 2  
音高イメージの把握力 A グループの音群判別力得点分布

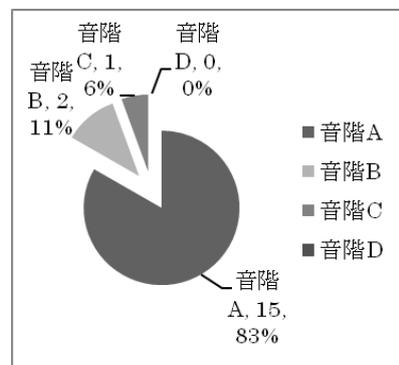


(3) 音階の音程把握力

音高イメージの把握力 A グループの音階の音程把握力の得点分布を 図 3 に示す。A の被験者の 83%は音階の音程把握力が A であり、音階の音程把握力と読譜力との関連性が示されている一方で、残り 17%が音階の音程把握力が特に優れていなくても、何らかの能力によって音高イメージの把握ができていることがわかる。

次に音楽的基礎能力の側から、音高イメージの把握力の得点分布をみてみることにする。

図 3  
音高イメージの把握力 A グループの音階の音程把握力得点分布

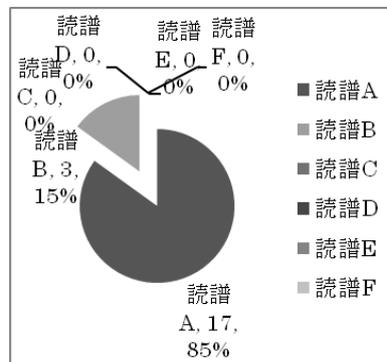


2. 音楽的基礎能力【課題1】【課題2】【課題3】【課題4】の結果から見た場合

(1) 単音の音名判別力

単音音名判別力がAである被験者の音高イメージの把握力についての得点分布をみると図4のようになる。この図4からわかるように、単音音名判別力がAである被験者の85%が音高イメージの把握力Aであり、残り15%も音高イメージの把握力Bで音高イメージの把握力C、D、Eの被験者は無かった。このことから単音音名判別力が音高イメージの把握力と密接な関係が有ることがわかる。(尚、図ではスペース上の理由から「音高イメージの把握力」を単に「読譜」と記している)

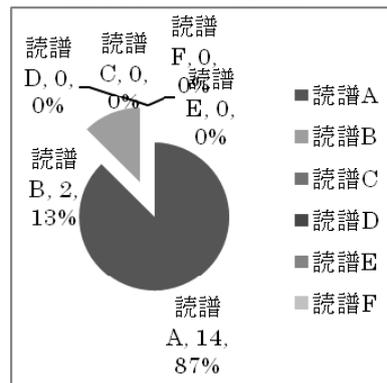
図4  
単音音名判別力がAである被験者の音高イメージの把握力



(2) 音群の音名判別力

音群音名判別力がAである被験者の音高イメージの把握力の得点分布をみると図5のようになる。この図5からわかるように、音群音名判別力がAである被験者の87%が音高イメージの把握力Aであり、残り13%も音高イメージの把握力Bで音高イメージの把握力C、D、Eの被験者は無かった。このことから音群音名判別力が音高イメージの把握力と密接な関係が有ることがわかる。

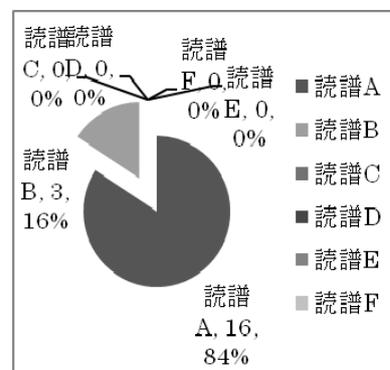
図5  
音群音名判別力がAである被験者の音高イメージの把握力



(3) 音階の音程把握力

音階の音程把握力がAである被験者の音高イメージの把握力の得点分布をみると図6のようになる。この図6からわかるように、音階の音程把握力がAである被験者の84%が音高イメージの把握力Aであり、残り16%も音高イメージの把握力Bで、音高イメージの把握力C、D、Eの被験者は無かった。このことからやはり音階の音程把握力が音高イメージの把握力と密接な関係が有ることがわかる。

図6  
音階の音程把握力がAである被験者の音高イメージの把握力



以上の結果から、音高のイメージ把握力は、単音の音名把握力、音群の音名把握力、音階の音程把握力のいずれの能力とも関連性があると考えられる。次に、2009年に視唱と3つの音楽的基礎能力との関係について実施した調査と今回の調査結果を比較したい。

## V. 結論と今後の課題

今回の調査を通じて、視唱力の場合と同様に音高イメージの把握力も、単音の音名把握力、音群の音名把握力、音階の音程把握力のいずれの能力とも関連性があると考えられた。

さらに、図7をみてわかるように2009年の調査における視唱Aの被験者の場合は、単音音名判別力、音群音名判別力、音階の音程把握力について全員100%Aであった(吉田2010b:66)が、今回の調査においては、音高イメージの把握力がAの被験者の場合に、単音音名把握力、音群音名把握力、音階の音程把握力はいずれも100%Aではなかった(図1、2、3)。

図 7-1 視唱 A の被験者の  
単音音名判別力

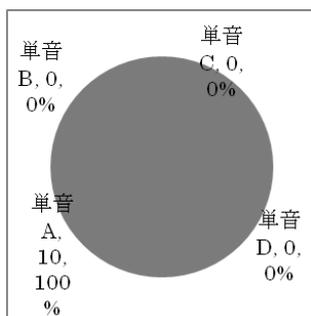


図 7-2 視唱 A の被験者の  
音群音名判別力

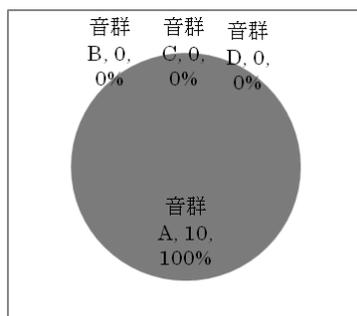
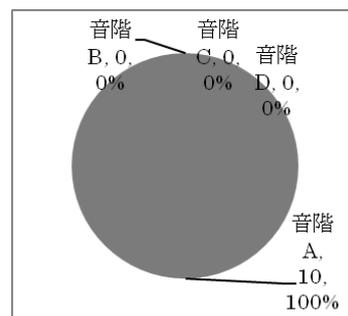


図 7-3 視唱 A の被験者の  
音階の音程把握力



つまり、視唱の場合は、単音の音名把握力、音群の音名把握力、音階の音程把握力のいずれの能力もすべてAであった場合にのみAであったのに対し、音高イメージの把握力の場合は、単音の音名把握力、音群の音名把握力、音階の音程把握力のいずれかがAである24人中19人(79%)がAであり、残り5人も全員Bであった。このことから、単音の音名把握力、音群の音名把握力、音階の音程把握力のいずれかの能力を高めることにより、今回の【課題5】の程度の簡単な楽譜から音高イメージを把握する力を育成できる可能性が考えられる。

単音の音名判別力はおもに幼少期に発達期があることについては、すでにいくつかの先行研究であきらかにされている(ウィズビー1984:15)(江口2001:121)。一方で、調性や調に基づく音程の把握は、後期児童期以降において発達するという研究がある(ハーグリーブス1993:105-106)。単音の音名判別力にこだわらずに、音群の音名判別力や音階の音程把握力のいずれかの能力を向上させることにより音高のイメージ把握力を高めることができるならば、年齢が高い場合でも読譜能力が向上する可能性が考えられる。また、2009年の調査と今回の調査との比較から、正しく視唱できるためには、楽譜から音高イメージを把握できるだけでなくさらに何らかの能力が加わる必要があると考えられる。

今回調査を実施した際、音高のイメージ把握調査において、楽譜を見て音高をイメージして曲の題名を答えさせる調査方法では、完全に正確に楽譜から音高のイメージを把握できなくても、イメージできた部分を手掛かりにして知っている歌を色々思い浮かべることにより、想像で補って曲名を推察できる場合があることがわかった。また、視唱に使用した課題曲と今回音高のイメージの把握力調査に使用した曲の難易度の差が大き過ぎた可能性もある。このため音高イメージの把握調査で用いる課題曲の難易度を上げる、他の調査方法の可能性を探るなど、さらに工夫と検証を重ねる必要がある。今後も教育に生かす視点から、引き続き研究を進めていきたい。

i 心の中に把握された音高イメージを音に出す表出方法としては被験者自ら楽器を使って表現することと、イメージした音高を声で表現することが考えられる。しかし楽器を使って、心の中の音高イメージを表出する場合楽器の音を採り弾きするなどフィードバックによる調整の可能性があり、正確な音高イメージの表出を妨げることが考えられる(大澤、大浦、宮崎2008:43-44)。したがって、2009年の実施時には被験者が音高イメージそのままの音高で歌う方法により調査をおこなった(吉田2010b:61-67)。

ii 今回は調査する音階を長音階に限定している。

- iii 調性とは中心になるピッチを持つような形で音階を使用する方法であるとスナイダーは述べている。(スナイダー2003: 145)
- iv 「音高を分類上区分したものを枠組みとしたもの」という意味と考えられる。
- v 心理学者の谷口高志は「対象を知覚し認知するための知識や枠組み。過去の経験や過去の反応様式を抽象化・組織化したもの」(谷口2000: 233)と説明している。
- vi 本論文では、ドレミ階名においてはド、ドのように下線を用いてオクターブ音高の区別をしている。
- vii 曲の選定にあたっては京都教育大学幼児教育専攻の指導教員平井恭子先生にご相談して、学生の各課題に対する認知度についてアドバイスを頂いた。呈示する楽譜は『こどものための名歌曲 200 選』(有) ケイ・エム・ピー、pp.105-241 を参考に筆者が移調して使用した。

#### 【引用・参考文献】

- ウィズビー、オードリー/バッシュ、ベルナル/P・ポメティオ、ロマン/阿部哲三/高橋秀敏 黒川典子訳『図説・子どもの発達と障害第7巻—音とことば 音響による自閉症児の治療—』(1984) 同朋舎出版、pp.13-23
- 内田照久(1992)「絶対音感保有者における移調メロディの認知過程」『名古屋大学学校教育紀要』39巻、pp.33-44
- 江口寿子(1991)『音はロケットみたいにとんでくる：絶対音感とは身につけられる』二期出版
- 江口寿子・江口彩子(2001)『新・絶対音感プログラム 才能は身につけられる』全音楽譜出版社
- 大澤智恵、大浦容子、宮崎謙一(2008)「音楽的音高の発声反応と音名反応」日本音楽知覚認知学会 平成20年度春季研究発表会資料 pp.43-46
- 谷口高志編著(2000)『音は心の中で音楽になる 音楽心理学への招待』北大路書房、p.233
- デヴィッドソン、L. 三雲真理子訳(1998)「子どもとおとなの歌唱—音楽への発達のアプローチ」『音楽の認知心理学』アイエロ、リタ編 大串健吾監訳 誠信書房、pp.113-153
- ハーグリーヴス、D.J.(1993) 小林芳郎訳 『音楽の発達心理学』田研出版、pp.78-108
- スナイダー、ボブ須藤貢明/杵鞭広美訳(2003)『音楽と記憶 認知心理学と情報理論からのアプローチ』音楽之友社
- 吉富功修・三村真弓・光田龍太郎他(2008)「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(1)—中学校入学時の音楽学力の実態を中心として—」『広島大学学部付属学校共同研究機構研究紀要』36号、pp.156-163
- 吉田直子(2008)「教員養成大学学生を対象とした『視唱』能力向上のための指導法—『モデル・パターン方式』の提案」京都教育大学修士論文
- (2010a)「楽譜を見てすぐ歌う力『視唱力』についての意識—幼児教育科の学生を対象とした調査より—」『京都教育大学教育実践研究紀要』第10号、pp.111-120
- (2010b)「ピアノ稽古事と読譜力との関連についての考察」『公益財団法人日本ピアノ教育連盟紀要』第26号 pp.61-67